

サンタクロースとメディアリテラシー

下村 健一

● 市民メディア・アドバイザー
● テレビ・キャスター



「サンタの夢を壊すな」論

私は職業柄、各地の教育現場に呼ばれてメディアリテラシーの一日講師を務めさせていただくことがよくある。

そこで体験的に自信をもつて言えるのは、「小学校高学年以上は、自分で短いビデオ作品を作ってみる《発信体験》が、《受信（読解）力》を養う上でも極めて有効である」ということだ。ニュース番組などを教材にした「鵜呑みにしない読解の仕方」を座学で一〇〇回聴講するよりも、「なるほど、編集作業をするところやって発信者の意図が必然的に介在しちゃうんだな」と実践で一回体験する方が、はるかに身に染みる。

しかし、それより低年齢の子どもたちには、「自分で撮って作ってごらん」と言う実践はなかなか難しく（後述の千葉大チームのような果敢なチャレンジはあるが）、指導は座学中心となる。ここでは、大好きなアニメ番組やヒーロー系のアクション番組を教材にして、「へえ、テレビに映るお話って、本物と作り物が混ざってるんだ！」という気付きや興味を子どもたちは得る。

「作り物」と言っても警戒感を植えつけるネガティブな指導ではなく、「アニメって、声や色や音でずいぶん感じが変わって面白いな」「アクションの役者さんって、ぶたれないのに本当にやられたように見える練習をして凄いな」等、《表現の工夫》への憧れに誘うポジティブな指導である。

ところが、こうした小学校低学年や幼稚園児へのメディアリテラシー教育の実践に対しては、しばしば耳にする批判意見がある。「あまり年少の子どもに、『テレビには作り物が混ざっている』と教えることは、夢を奪う時期尚早な指導で、『サンタクロースは実はいない』とわざわざ教えるようなものではないか」という意見だ。たしかに、ウルトラマンと怪獣が格闘しているテレビを手に汗握りながら見入っている幼児に向かって、「これ、どっちも中に人間が入ってるんだよ」と教えることは、余計なお世話にも感じられる。

しかし、この一見正しそうな《サンタの夢を壊すな論》は、実は年少者のメディアリテラシー教育に対する筋違いな批判である、と私は思っている。どこがズレているのか、ちょっとここで考えてみたい。

教えることの《有益性》

幼い子どもに「サンタは作り物」と教えることと、「テレビ（の一部）は作り物」と教えることは、実は同じではない。極言すれば、前者は**不必要かつ有害無益**で、後者は**必要にして有益無害**なのだ。

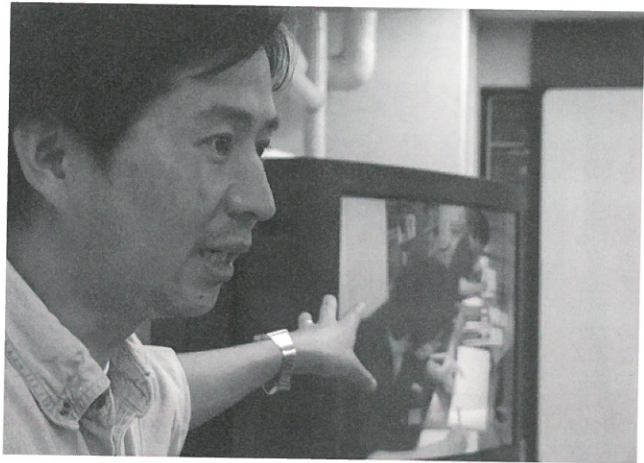
私の知人には、なんと高校生になるまでサンタクロースの存在を信じていた女性がいるが、信じ続けたことで、彼女の人生には何の損失も無かった。つまり、真相を知る必要性など、全く無かった。実際、「サンタが実はいない」と子どもに教えることで、プレゼント要求の矛先が遠慮なく直接親に向かって来るようになる、というデメリットはすぐ思い浮かぶが、私にはメリットは考えつかない。

それとは対照的に、「テレビの一部は作り物」と知ることには、明確な必要性とメリットがある。例えばアクション番組で人を殺したり傷つけるシーン、バラエティ番組でお笑いタレントをいじめめるシーン等をテレビで見た幼い子どもが、それらを現実に行っていることと思ひ込むと、自分もそれ

を受容し時には模倣する恐れがある。しかし、それらが作り物だと認識できれば、「現実には、やってはいけない事なんだ」という分別（文字通り！）は守られる。

JMEC（日本メディアリテラシー教育推進機構）の藤川大祐理事長（千葉大教育学部助教授）が指導している学生たちが、アクション系のビデオ作品『侍ファイブトリポンの天使』を地元の幼稚園児たちと一緒に創った時のエピソードは、示唆に富む。脚本・撮影・出演のすべてを園児達が行ったこの実践について、藤川氏はこう語る。

「これは、日頃から素朴にテレビ番組を真似て遊んだりしている『ごっこ遊び』の延長ですが、それに加えてビデオカメラで、自分たちの様子が映像として撮られてしまう。そこで、さらに格好良く映るためには、色んな《工夫がある》ということを知ります。例えば、侍ファイブが闘うシーンで使用する剣は、相手を突くと（いかにも刺さったように見えるけれど実は）刃が引っ込むようになって見えます。そういう仕掛けのある武器を使っている、実際には痛くないということ、子どもたちは知るわけです。それ以来、子どもたちは暴力的な喧嘩にな



教えることの《無害性》

前節冒頭の太字部分の中で、一つだけまだ検証していない語がある。それは、年少者へのメディアリテラシー教育が《無害》かどうか、という問題だ。前述の千葉の幼稚園児たちは、あの実践以降、アクション物の子ども番組が「作り物」であることを知って、もはや楽しんで視聴することが出来なくなってしまうだろうか？ もしそういう弊害があるならば、「夢を壊すな」論も半分は正しい、ということになる。

しかし、この幼稚園からそのような弊害の報告は聞こえて来ていない、と言うし、別の研究者によるもっと精緻なデータもある。昭和女子大学教員の駒谷真美氏らが、仙台市内の公立小学校一年生二クラスを対象に行った調査結果を、ご紹介しよう。

駒谷氏らと私などが数年前に合作した、小学校低学年向けのメディアリテラシー教材ビデオがある。アニメやアクション物の番組制作のクラクリ・意図・工夫などを平明に解説したものだ。ビデオの視聴前と後で、駒谷氏らが子どもたちに様々な比較質

問をしたところ、その教育効果は明白だった。：で、その中に紛れ込むように、ビデオ内容とは関係がない「サンタクロースは実際にいると思うか」という質問があった。その結果は、——「いると思う」が視聴前後ともに同数（八二・四％）となったのである。このデータを受けて、駒谷氏は語る。

「サンタを信じている実験群の児童でも、（このビデオ教材により）『テレビの現実性理解度』は上昇する一方で、サンタを信じ続けていた。換言すれば、本教材によるメディアリテラシー教育の授業を受けても、児童の一般的なファンタジーは維持されていた。〈中略〉『テレビの中の空想と現実』について学習することは、教師や保護者が懸念する『ファンタジーの破壊』に繋がらないことが証明された。」（本年六月刊予定・日本教育工学会論文誌所収「小学校低学年向けメディアリテラシー教材の開発研究」より）

思い起こせば私自身、幼稚園の頃、「ひょっこりひょうたん島」の操り人形の仕組みを知ってしまったも、少しも白けることなく物語にはまり続けていたものだ。私の妻も、役者が台本を演じているだけだとたぶ

りそうになると、『侍ファイブだって、実際には痛くないんだから、ちよつと手加減しなよ』とか『本当に痛くするのは、やめようよ』なんていう話をしているそうです。（本年一月七日放送・TBSラジオ「下村健一の眼のツケドコロ」より）

現実と作り物との見事な峻別能力を、この子たちはメディアリテラシー教育によって獲得したのだ。

ん知っているはずなのだが、それはもう夢中で韓流ドラマにはまっている。みんな、現実を知っても、夢は壊れていないのだ。

そう、人間は、からくりがわかってからも、《夢見続ける能力》をもっているのだ。メディアリテラシーの学習によって、テレビの影響力のネガティブな部分だけを除去し、ポジティブな楽しみ方だけを残すことは、きつと可能なのだ。

夢を保つために現実から遠ざけて温室に入れておく、という指導では、やがて突然現実に直面してしまった時の幻滅が大きい。最初から北風の中で夢見る訓練をしていれば、大人になっても逞しく夢を追い続けられる人になる。メディアリテラシー教育から遠ざけられた子どもは、「テレビが言うこと」を鵜呑みにし続け、年長になつてから急に何かの誤報事件などを見て「メディアなんて嘘ばかり」という全否定に走ってしまう。（実際、テレビ局にいて視聴者からの感想メールなどを受けていると、鵜呑み思考と全否定思考の大人の多さに、愕然としてしまう。）これからの子どもたちには、逞しい読解力を身に付けて欲しいと切に願う。

サンタは本当にいないのか

ところで私は、普段いちいち我が子に「今日は何かプレゼントを買ってやろう」などとは思わない。ところが、どういうわけかクリスマスの時だけは、ごく自然に、「何か買ってやりたい」という心になる。「ジングルベルに踊らされて散財することはない」という冷静な考え方をしてもよさそうなのなのに、そんな発想は微塵も浮かばない。誰が、私の思考を操作しているのか？ しかも、私だけではない。そんな原因不明の心の変化が、日本中の家庭で同時に起こる。

どこから来るのか知らないが、大人たちの胸中にある日一斉に宿る、「子どもたちの喜ぶ顔が見たい」という心。それが「サンタクロース」という奴なのではないか、と、実は私は今でも大真面目に思っている。その意味で、サンタクロースは実在するのだ。そうでなければ、いくら商業界が大宣伝を打ったって、こんなに沢山のプレゼントが一夜にして贈られるはずがない。

ここで大切なのは、大人たちが見たいのは、子どもの《喜ぶ》顔であって、子ども

の《だまされている》顔ではない、ということだ。そう、サンタという名の「心」が求めているのは、幼い子らをだますことではなく、喜ばすこと。この点に於いて、メディアの送り手も、同じなのだ。受け手をだまそうという意図ではなくて、工夫して伝えたい・より判りやすく知らせたい⇒受け手を喜ばせたい、という心。それが土台にあると認識することが、メディア読解の第一歩だ。

そんな「心」の存在⇒サンタの存在に気が付かせることができれば、幼少期のメディアリテラシー教育は、大成功だと思う。

※ <http://www.tbs.co.jp/radio/np/eye/060107.html>

（しもむら・けんいち）

